

年間第6主日 2014.2.16

律法について

マタイ福音書 5章 17-37節

5:17 「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っではならない。廃止するためではなく、完成するためである。

5:18 はっきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。

5:19 だから、これらの最も小さな掟を一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするように教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。

5:20 言うておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていないければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」

5:21 「あなたがたも聞いているとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。

5:22 しかし、わたしは言うておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。

5:23 だから、あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したなら、

5:24 その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい。

5:25 あなたを訴える人と一緒に道を行く場合、途中で早く和解しなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれるにちがいない。

5:26 はっきり言うておく。最後のクアドランスを返すまで、決してそこから出ることはできない。」

5:27 「あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。

5:28 しかし、わたしは言うておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。

5:29 もし、右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれない方がましである。

5:30 もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである。」

5:31 「『妻を離縁する者は、離縁状を渡せ』と命じられている。

5:32 しかし、わたしは言うておく。不法な結婚でもないのに妻を離縁する者はだれでも、その女に姦通の罪を犯させることになる。離縁された女を妻にする者も、姦通の罪を犯すことになる。」

5:33 「また、あなたがたも聞いているとおり、昔の人は、『偽りの誓いを立てるな。主に対して誓ったことは、必ず果たせ』と命じられている。

5:34 しかし、わたしは言うておく。一切誓いを立ててはならない。天にかけて誓ってはならない。そこは神の玉座である。

5:35 地にかけて誓ってはならない。そこは神の足台である。エルサレムにかけて誓ってはならない。そこは大王の都である。

5:36 また、あなたの頭にかけて誓ってはならない。髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできないからである。

5:37 あなたがたは、『然り、然り』『否、否』と言いなさい。それ以上のことは、悪い者から出るのである。」

説教

今日のテキストは従来のユダヤ教律法を超えるはるかに厳しい戒めが語られます。それはわたしたちに対する努力目標として告げられたことばではないことは以下の引用からわかります。

言っておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。20 節

このあと具体的な罪の事例があげられます。そこに人間の罪がすべて例示されているわけではありませんが、ていねいにみ言葉を読み解いていけばそこには厳しい中にイエスの愛の戒めがあることがわかります。

みだらな気持ちで女性を見るものはそれで姦淫をおかした、離婚は神の教えに反する、現実の世界の歴史の中でこれらのことば・教えにいかにより多くの人が断罪されてきたことでしょう。わたしたちはこのイエスの戒めを聞いたときに、私たちはあらゆる義に対して無能力であり、神の前では罪びとであることを深く自覚します。

人間はどんな社会でも具体的に生き、かつ生活する場合には、どうしても相対的に生きていくしかないという現実があります。そうはいっても仕事があえ、とか、なにしろ相手のあることだからとか、イロイロあるわけです。つまり現実には相対感情、相対意識で生きている。だからこそ逆に絶対的なものにあこがれ、そこにひかれるということがあります。

わたしたちは一元化されることをある面で望みます。これさえ守っていれば大丈夫というものが欲しくなります。その掟が生活と密着していれば安心できます。ユダヤ教は律法を人間の生きることの意味と調和させ、現実的な倫理観をうちたてて、現実と信仰を一元化したともいえます。律法さえ守っていれば信仰も生活も大丈夫、というわけです。イエスの生涯はユダヤ教との闘いだととくにマタイ福音書では強調されます。イエスの福音とユダヤ教の律法（律法主義者、ファリサイ派）は厳しく対立しました。そのイエスがいわば超「律法」を山上で説教しました。しかしわたしたちはその教えを忠実に実行できません。福音を人間の生きることの意味と調和させ、現実的な倫理観をうちたてて、現実と信仰を一元化できていないのです。

神の御子イエス・キリストが山上の説教でこのことばを語った、2000年後の現代でもこのことばが残っている、これは人類が誇るべきことです。そして、わたしたちキリスト者にとって十字架を通してこのみことばを聴くことは大きな慰めであり希望です。